所報

島根県教育庁
隠岐教育事務所
隠岐の島町港町塩口24
電話2-9772

子供の見方になるから…

本県では、令和7年度から令和11年度にかけ、「第二期しまねの学力育成推進プラン」が策定され、目標の一つに「多様な子どもの主体的な学びを支える授業づくりの推進」が設定されました。その中で、①ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり②一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導の工夫ということが推進項目としてあげられています。

隠岐管内においても、特別支援教育に係る学校訪問や相談を通して、これらの推進項目を含めたサポートについて、各町村教委や隠岐養護学校センター的機能の先生方と連携しながら取り組んでいるところです。

先日、ある学校を訪問した際、国語の授業で、教科書の学習以外に、「しりとり」に取り組んでいました。これは、ただ遊んでいるわけではありません。音と文字を結びつける、つまり音韻認識の力をつけるために非常に大切な取組になります。文字を読むためには、この音韻認識の力が必要不可欠で、この力が付くことで文字をスムーズに読めるようになります。

「文字を読めるようになりたい」という子供たちの教育的ニーズだけでなく、どの子も文字を読めるようになるための土台づくりをする、まさにユニバーサルデザインの授業の一つではないでしょうか。

隠岐の島町教育委員会では、昨年度に引き続き、一年生の担任を対象に、ひらがな読みの実態把握について研修会を実施しています。今年度は、従来通りのひらがな読みの検査、デコーディング指導に加え、音韻認識を育てる音韻遊びを紹介し、各小学校で取り組んでいただくこととしました。早速取り組んでいる学校があり、隠岐の先生方の特別支援教育に対する想いを感じたところです。

ある小学校の先生が作った学級通信に、このような言葉が書いてありました。「子供の見方になるから、子供の味方になる。まずは、子供の土俵に乗って、そこから見える景色を共に楽しむ。」これは、隠岐の島町教育委員会特別支援教育専門員の野津保先生の言葉です。この学級通信を書いた先生、しりとり遊びを取り入れてくださった先生、さらに学校訪問で出会う先生方、どの先生も、子供たちのことを考え授業をされています。そして、どの先生も子供の味方であると感じます。だからこそ、子供たちの視点に立ち、子供たちの困り感に寄り添った支援につながっているのではないでしょうか。

私たち指導主事も、野津保先生の言葉のように、子供の視点に立ち、子供の思いを感じ、そして生き生きと学ぶためにはどうしたらよいのか、子供の味方になって考え続けることのできる教員でありたいと思います。

（広兼）

今を大切に

令和6年10月に発表された文部科学省の「問題行動・不登校調査」によると、小・中学校における不登校児童生徒数（国公私立計）は、島根県で2315人となりました。

「ありがたかった。」

この言葉をAさんが発したのは、中学校を卒業して25年経ってからです。中学校生活の多くを教室で過ごすことのなかったAさんに、心に残っている出来事を聞いたことがあります。

・校長室へ行くとコーヒーを出してくれた。
・理科準備室で先生と一緒に寝袋で寝た。
・入ってはいけない屋上で秘密の遊びをした。
・「来んでいい」と言ったのに担任の先生が家に来てくれた。
・毎日、友達が会議室に給食を運んでくれた。
・その友達のために、卒業式はきちんとした格好で出た。

全て、先生方や友達との関わりの中で生まれた記憶です。中でも、特に心に残っているのは、Aさんの親が危篤のときに、先生が病院へ連れて行く車を止めて、

「ごめん。急がんといけんけど、これ以上痛い思いをする必要はないけん。」

と、亡くなっている猫を道の端に移動させた先生の姿…。

IT技術の発達によって、10～20年後に49パーセントの職業がなくなる可能性があるという話を聞いたことがあります。私達教職員の目の前にいるのは、幼くとも自分の思いや考えを持った一人の人間です。AIは共感しているように装うことはできても、人の経験や人間性から生まれる『本当の共感』を与えることはできません。数十年後に、「ありがたかった。」と気付くことができたのは、人の感情を動かす成長の種を先生方や友達がまいてくれていたからです。

コロナ禍以降、増加が続いている不登校の状況ですが、学校訪問をすると、不登校の人数だけでは測ることができないものもあるように思います。子供たちは、先生方のかけてくれた言葉や生き方から多くのことを学んでいます。子供たちへの働きかけで何が正解なのか悩む日もあるかと思いますが、先生方や学校が、「今これが一番いい」と思ったことを応援しています。

（池田）